

=====

GCOE NewsLetter  
[No.29 2010/2/24]

---

佐藤彰一特任教授の日本学士院会員選出への祝辞（トゥベール教授）  
2009年度第2回gCOE論文賞の募集について（再掲）  
gCOE講演会の開催について  
次回のオープンレクチャーについて  
「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約  
グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

---

■ 佐藤彰一特任教授の日本学士院会員選出への祝辞（トゥベール教授）

---

「佐藤彰一教授 歴史家の横顔」

佐藤彰一教授が名声ある「日本学士院」の会員に選定されたという知らせは、西欧の同僚や友人にとっても大きな喜びをもたらしました。彼らがこの出来事に、佐藤教授がなしてきた特別な功績の承認を見たのは正当であり、ここで私は、われわれの満足に十分な根拠があることを証言したく存じます。

実際、佐藤彰一教授が、ヨーロッパで最もよく知られた西洋中世史の専門家であることに疑念を挟む余地はありません。佐藤教授はとりわけフランスの中世初期史（5-11世紀）を研究領域としていますが、イギリスやドイツやアメリカの大学とも活発な交流を保っています。私は、エクス＝アン＝プロヴァンス大学やプリンストン大学、われわれの二つの高等研究院（社会科学高等研究院と歴史学・文献学部門を擁するソルボンヌの高等研究院）において、「招聘教授」の資格で佐藤教授が行った教育が大きな反響をもたらしたことを想起したく存じます。加えて、稀有な栄誉として、2001年にはコレージュ・ド・フランスの国際講座に任命されました。私の知るかぎり、佐藤教授は中世初期フランスについて講義を行うためにフランスの最高学府によって招待された最初の日本人識者です。大成功を収めたその講義は、私にとってとても良い思い出となっています。

私はここで短く触れることしかできませんが、これらの栄誉は佐藤教授が早くも1970年代から最初はカンで、続いてパリで受けた専門教育に始まり、西ヨーロッパ、とくにフランスで行ってきた研修滞在を飾ることになりました。かくして私は、多彩かつ内容豊かな学術作品、日本の歴史学が作り出す風景の中で、その堅固な方法論と独創性において異彩を放つ仕事が有する特別な価値に触れる機会を与えられたのです。

この新たな学士院会員の学問的業績が示す最初のオリジナルな特徴は、とくに重要な研究領域である中世初期トゥレーヌ地方の歴史を、見事な腕前で掴み取ってい

るところに由来します。メロヴィング朝期フランスの歴史にとってきわめて重要なこの地方は、利用可能な史料の豊かさ、すなわち会計文書、経済史の史料、トゥールのグレゴリウスのような第一級の叙述史料・聖人伝史料の存在によって際立ちます。佐藤教授は、このような歴史研究の戦場において、テキスト史料の批判的研究をわがものとし、そこから卓抜した総合的な地域史の記述を引き出すことのできる力量を示したのです。

第2のオリジナルな特徴を述べましょう。しばしばありがちなこととは反して、佐藤氏は最初に選んだ研究領域に閉じこもることなく、研究の公表を通じて、ヨーロッパ中世学について、また長期的な時間幅で捉えることによって、とりわけフランス史について広大な展望を開くべく努めてきました。この点に関して、彼が著したいくつかの作品は、優れて炯眼な日本の読者に、西洋中世史全般について最良の解説を与えてくれていると言っても大げさではないように私には思われます。著しく要求度が高く、批判精神に満ちた学殖の世界のみならず、きわめて広範な総合の領域をも自由に駆け回る佐藤教授は、非の打ちどころのない西洋中世史家と見なしうるように思われるのです。

最後の、しかし軽んじられるべきではないオリジナルな特徴を、はっきりと述べておかなければならないように思います。すなわち、佐藤教授が、修得した中世史研究を基盤として学際的な共同研究を引きおこし、そこに活気を与えるのに優れた資質を有していたことです。こうした共同研究によって、様々の分野の専門家たちが自分たちの経験から得た知識を突き合わせ、大いに期待の持てる独創性を備えた壮大なプログラムの発展に活かすことが可能になりました。このプログラムとは、(狭義の)歴史テキスト、法テキスト、制度に関わるテキストや(言語学的であると同時に美学的な観点から見た)文学テキストを包摂するテキスト科学のことです。その主唱者により正当にも「テキストの生成と解釈」と特徴づけられたこのアプローチは、まさに日本において、実り豊かな共同研究を引きおこし、方法論的にきわめて有益な成果をもたらすのに貢献しました。

時代を画する諸作の発表に彩られた、このような知的な歩みこそが際だっているのであり、まさしく西欧の同僚たちによってそのように認知されているのだと私には思われます。それゆえ彼らは、これほどの国際的な名声に浴する知識人が「日本学士院」の会員に選定されたことを心の底から喜んでいるのです。

ピエール・トゥベール  
コレージュ・ド・フランス教授  
フランス学士院会員(碑文・文芸アカデミー)

(加納 修訳)

---

■ 2009年度第2回gCOE論文賞の募集について(再掲)

---

グローバルCOEでは論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2010年3月発行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

応募の受付期間は2010年2月18日（木）～2月26日（金）です。

応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。

[http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/20091coe\\_2/](http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/20091coe_2/)

---

#### ■ gCOE講演会の開催について

---

日時：2010年4月14日（水）午後4時30分より

場所：文学研究科大会議室

講演者：スティーヴン・ハリソン教授（オックスフォード大学・古典ラテン文学）

題目：“Victorianising Vergil—19世紀の英文学における『アエネーイス』の受容—”

使用言語：英語

---

#### ■ 次回のオープンレクチャーについて

---

次回のオープンレクチャーは4月に開催される予定です。詳しい情報は今後グローバルCOEのWebページやニュースレターでお知らせします。

---

#### ■ 「テキスト布置解釈学各論」（講義科目）の要約

---

各論I

Shoichi Sato, “In Quest of Identification of a Medieval Religious Manuscript : Textual Configuration of Vatican Ottoboni Latin no.163.”

At the outset of my class, I explained how should I carry out the class of this specified study of “Hermeneutic Study and Education for Textual configuration”, in the second semestral term in 2009. I illustrated, also, an academic background of my inquiries on the Vatican manuscript, Ottoboni latin, no.163. After these preliminary observations I, rather we, launched on the reading of the manuscript which was a martyrology of unidentified origin and certainly belonged to the 14th century, according to the handwriting. As our experience has been very limited as to reading of manuscript written in the later Middle Ages, our progress upon reading this martyrs’ calendar has been made slowly in the class. On the final stage of the term, we arrived at on the 31st December. Only eight days of entire itinerary were absorbed! Because the calendar begins on the 24th in December. All through our reading and inquiries in the class, however, we got a pair of clues that might

permit us to identify the origin of this manuscript. I finished my class in that term, with my reflections upon the configurative value of the martyrological text.

### 各論III 釘貫亨

能動態と受動態が対応する西洋語のヴォイスと異なって、日本語は、受動態と能動態が対応せず、受動態（受け身）と使役（レル・ラレル：セル・サセル）が意味上、形態上対応し、その間に自動詞と他動詞の対立が介入するという独自のヴォイスの体系を備えている。かかるシンメトリカルな対応は、平安時代以後歴史的に成立した。現代語のレル・ラレル、セル・サセルは、平安時代語のル・ラル、ス・サスの後継形態であり、それぞれ古代語の「寄る自一寄す他、移る自一移す他」などの自動詞語尾ル、他動詞語尾スに類推して成立した。日本語の受動態形式は、自動詞に類推して発達してきたので、意味の中核は受動ではなく、自発である。さらに日本語の受動態構文には、無生物のモノを主語に取らず、話し手や動作主の被害、迷惑を専ら表示するという特徴的な制約があった。

古典日本語には、キ・ケリ・ツ・ヌ・タリ・リなどテンス・アスペクトを細かく表示する現代語にないシステムが存在した。中でもタリとりは、奈良時代に名詞修飾に突出した機能を発揮して登場した。タリは、「枯れたる木、荒れたる都、痩せたる女」などの過去分詞的用法に排他的な造語力を発揮した。奈良時代語における過去分詞的用法の資源は、上代語の受け身助辞ユ・ラユの機能の貧弱さによって自動詞に偏っていた。タリが介入する過去分詞的用法は、平安時代以後も増強し、新たな受け身助辞ル・ラルを加えて他動詞を自動詞に転換する過去分詞的用法（「建てられたる御堂、繕はれたる水」など）が発達してテンス・アスペクト表示の活用助辞の中でタリの文法的機能が突出した。この事実は、中世以後、テンス・アスペクト表示形式の再編が行われ、タリだけが残存して、今日のタ（ダ）一極に収束した事態に関与した可能性があると思われる。

### 各論V 重見晋也

本講義では、テキストの存在様態について、テキスト布置の観点から哲学および文学分野における先行研究に遡って検討し、テキスト布置解釈学の基幹をなす基礎的な考察を行うことを目的としていた。主として取り上げた先行研究には、ミシェル・フーコーの『知の考古学』、ポール・リクールの『時間と物語』、ジェラルド・ジュネットの『パランプセスト』およびナラトロジー理論、ハンス＝ゲオルグ・ガダマーの『真理と探究』であった。フーコーにおいては、「ディスクール/エノンセ」の区別を基礎として1つ1つの「エノンセ」の集合総体として「ディスクール」が定義づけられており、テキストとしての存在様態は「ディスクール」の存在様態

に等価なものとして考察されていることを確認した飢えで、「ディスクール／エノンセ」概念にはテキスト布置の構成要素を客観的に基礎づけるための考察が欠如していることを指摘した。

次にプラトンの『国家』にまでさかのぼってナラトロジー研究におけるテキスト要素の考察を概観した上で、ジュネットの『パランプセスト』で与えられるテキスト布置の構成要素の定義を考察した。これら文学的なアプローチによるテキスト布置に関わる研究においては、テキスト現象に立脚した包括的なテキスト布置概念の構築に至っていないことを指摘した。

リクールの『時間と物語』においては、独自のミメーシス過程の考察の中で、3層に重層化した3つのミメーシス段階が作者から読者へのコミュニケーション過程において、作者から発せられたテキストが線状的に処理されていくとされていたが、こうした考え方ではテキストの持つ意味の重層化という側面は説明できる反面、個々のミメーシス過程の役割がしばしば曖昧になっているという問題点を指摘した。ガダマーについてはあまり時間を割かなかったが、テキストの内的要請が重視され、主観主義的な相対主義を回避するような、イデア的存在としてのテキストが前提となっていることを確認するとどまった。以上の考察から、テキスト布置に関して、非-相対主義的な側面をテキスト構造あるいは理解プロセスとして基礎付け、それらがコミュニケーション過程の中でどのような役割を持つのかについて、個々の研究領域毎に個別具体的な研究を進めることが肝要であるとの結論を提示した。

## 各論VI ゼーン・ゴebel

本講座では、テキスト布置の解釈学的研究から得られる知見を、国際的な状況に於ける英語による研究発表へと応用した。とりわけ、大学院生がテキスト間の幾つかの関係を理解する手助けをする一方で、彼らにそれらの理解を自らの研究の準備と口頭発表を通して応用する機会を与えた。授業では2つの主要なテキスト間関係を検討した。一つは、学生自身の学問的背景から来る前テキスト(つまり自らが専攻する分野に於ける理論や方法論に関する知識)とメタテキスト(つまり、研究上の疑問への適用を介した、それら前テキストに対する自らの解釈)の間の関係である。もう一つは、これらのメタテキストがパラテキスト或いはジャンルとして表現され得る方法に関するものである。例えば、パラテキストは要約、研究報告書、雑誌論文、学術書、学会発表等の形を取り得る。学生は次に解釈学的テキスト布置に関する理解を、自らの分野に於ける研究上の基礎(つまり前テキスト)を検討することで応用した。この過程を経ることは、学生が学問的な知識の基礎にある隙間を見つけ出す助けとなった一方で、そのような知識の基礎を解釈することにも寄与した。つまり、自らの現在の研究計画の口頭発表という形のパラテキストとして次いで再文脈化したメタテキストを形成することである。

---

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

---

第19回ブリーフィング（2010年1月21日）

小澤 実「記憶と歴史叙述 ブレーメンのアダム『ハンブルク司教事績録』の証言を通じてみるゴーム老王」

本報告では、イエリング王朝開祖ゴーム老王（-958）の活動を記録したブレーメンのアダム『ハンブルク司教事績録』（1070年）のテキスト分析の一部を提示した。

まずは、分析対象である『事績録』で確認されるゴームの記述箇所の歴史叙述上の特徴をあぶりだした。結論は三つある。ひとつは『事績録』は、ハンブルク大司教座が首都大司教座への昇格を目指すためのプロパガンダ的要素を備えている点である。二つ目は、ゴームの記述が組み込まれている「ウンニの事績」において、ゴームはウンニに敵対者という役割を担わされているにすぎないことである。三つ目は、アダムのゴームに関する情報は、「あるデーン人の司教」からの伝聞に基づく点である。

以上を踏まえて、アダムの北欧に関する情報源であるデンマーク王スヴェン・エストリズセンの記憶に注目した。結論をかいつまんで言えば、アダムはスヴェンと「あるデーン人の司教」から異なるデンマークの歴史を聞き及んでいた。なぜ、デンマークの過去の歴史をめぐる両者の記憶は異なってしまったのかというのが現在の課題である。

次回のメール版NewsLetterの発行は2010年3月中旬を予定しています。

.....  
GCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.29

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....